

# 保育の変革を目指して(4)

― 折々に考えたこと ―

入江 礼子

## 共に支え、つながり、育ちあう

はじめに

この五年間は静かに閉じた「静」の園から保護者をも保育に巻き込む「動」の園への移行プロセスであり、保  
育者もまたさまざまなことに対峙・葛藤しながら歩み  
を進めてきた。これは私と現園長のNさんがP女子大  
学幼稚部(以下幼稚部)に園長・副園長として赴任する  
とき、「園を改革する」ということを大きく意識して

いたこととかかわりがあるのかもしれない。ともかく  
「子どもたちが元気に遊ぶ園」にしたい。そのため  
は子どもを中心に据えて保育者と保護者が「共に支  
え、つながり、育ちあう」ことが必要で、そのキーワー  
ドは「開く」ということではないか。変革のプロセス  
で私たちはこんなことを意識するようになった。  
このスローガンともいえる「共に支え、つながり、  
育ちあう」という言葉も、「開く」という言葉も、ど

のようにして紡ぎだされたのかは実はよくわからない。幼稚部という場に身を置き、生活を始めたとき、この場に必要なのが直感的に言葉になったという感じである。こんなふうに直感的なひらめきとして出てきた言葉ではあったが、この五年間行き詰まったときもこの方向で考えていくと、これを打破するための方策が見えてきた。これらの方策は五年の間にさまざまに紆余曲折を経ながら現在も幼稚部に位置づいている。初めは小さな源流であったものが五年の歳月を経るうちに、今では複雑につながりあい、園としての大きな力動性を醸し出している。今回はその力動性の源流が仕掛けられた経緯を見ていくことにしたい。

### 園内研修

「保育についての話し合いは保育実践の現場であれば欠くことのできないものだ」ということは学生時代に愛育養護学校幼稚部の前身である「家庭指導グルー

プ」で実習して以来の私の持論でもある。しかしその後、このような保育の話し合いは案外行われていないという現実もあることを知った。幼稚部に赴任してみると、ここでもその例に漏れず、行事の相談などの話し合いは不定期にあるものの、恒常的な保育の話し合いは行われていないことがわかった。「子どもたちが遊んでいないように」見える状況を変えていくためには、話し合いの機会をもたなくてはならない。それかなり頻繁にしなければならぬと考えた。

そこで週一回「園内研修」と名づけて、保育の話し合いを行うこととした。「園内研修」というと幼稚園や保育所などで園のテーマをもって取り組む場合の話し合いを指すことが多い。これは日常的に行うというより、その課題解決に向けて日常の話し合いを踏まえて、その一段上に位置づける場合がほとんどであろう。しかし私は普通であれば「職員会議」と銘打つ話し合いをあえて「園内研修」と呼びならわすことにした。

打ち合わせから、保育の話し合いまで全てが研修となりうると考えたからでもある。こういう日常からいずれは研究課題も立ち上げたいとも夢見たのである。

この五年間では園務、行事の話し合い、保育の計画、保育内容に関する話し合い、子どもの成長発達に関する話し合い、保護者に関する話題、園児募集に関する事など、幼稚園という場が背負わなければならないありとあらゆる話題が話されていった。一年という周期の中で、また五年という流れの中での主話題は折々変化した。しかしこの五年間貫き通したこともある。それは担任もフリー保育者も園長・副園長も、時には事務方も参加する全員参加の原則である。

### 指導計画の作成

こうして園内研修が始まったが、各学年の保育がどのような計画をもって進んでいくのかを話し合うときには資料があった方よい。園内研修は週一回行われ

る。日案レベルで毎日書くよりも週間指導計画と日案を合体させた週日案が合理的であり、一週間を見通せることもあって週日案のフォームを作成した。それ以後三回に渡って改訂を繰り返す（その状況については『幼児の教育第一〇二巻第十一号』に詳しい）ことになるのだが、この週日案があることで園内研修に骨を一本通すことになった。それはクラスの担任が、一週間を子どもとどのように生活していこうと思っているのか、ということと、その根拠を園全体で共通理解できることである。

この週日案はそのフォームを見直すことの中から、保育者がどのように他の保育者と連携をとっていこうとしているのか、ということや、自分の保育者としての課題や積極的に取り組んでいることがわかりやすいものへと改定されていった。また、若い保育者が多い現場であることもあって、一生懸命取り組むのだが、帰宅が遅くなり、疲れすぎて病気になる保育者もで

た。そこで保育後の仕事にどう取り組んでいくかというところが大きな課題となった。その結果、保育後の仕事を予め週日案に全員に共通理解できるように入れ込んでおくという工夫をするようになっていった。

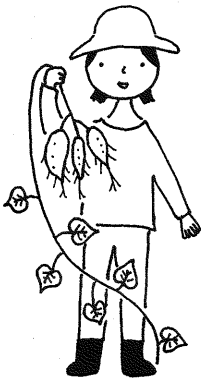
### 保護者と園長・副園長との懇談会

園長・副園長が代わるといことはそれだけで保護者の心配を誘ってしまう。園の方針を一新したこともあり、ともかく小まめに保護者と会うチャンスをつくらなくてはと考えた。クラス懇談会は今まで通り、原則として学期に一度行うということを踏襲した。それに加えて立ち上げたのが各学年月に一度ずつの園長・副園長との懇談会である。特に一年目は担任たちにも私たちの保育方針が了解しきれていないこともあり園長・副園長でその部分を担わざるを得ないという事情もあった。主な内容は月の行事の流れや保育の内容などに対して、保護者が見通しをもてるようにするこ

と、また、子どもたちの成長や遊びの様子を伝えることであった。保護者の方からも子どもに関して心配なことや園の方針に対する質問、行事や保育に関することなどで思っていることなどを率直に述べてもらう場となっていた。私が赴任する前は対話形式の園長との定期的な懇談会は設定されていなかったためか、保護者もこの場をどう使っていたらよいか戸惑っている面もあった。

しかし、この場が定着してくるにつれ、今度は幼稚園に対する要求が度を越えているのではと思うほど増えていった。「まずは聞きます」というこちらのスタンスが浸透していった結果ともいえるが、不安の裏返しでもあるこ

れらの要求の中には、ときに私たちの保育の弱点を言



い当てているものもあった。また保護者から、いわゆる不満が出てくるのは、子どもの育ちが停滞しているときであることも多いというのが、この懇談会を通して気づかされた。子どもの育ちに不安をもつ保護者の声は辛らつであつても聞く耳をもつ価値があり、自分たちの保育の質を上げていく手がかりになるといふことを、痛みを伴いながら学んでいったのである。

### 保護者の保育参加

幼稚園の旧園舎には各保育室にマジックミラー室が設置されていた。保護者は年に何回かこのマジックミラー室に入つて、保育室にいる我が子を本人に知られずに観察し、終わるとそのまま我が子を見つからないようにそつと帰宅したという。そのような観察型ではなく、参加型の保育参加ウィークを年二回実施することにして、現在までに十一回を数えている（保育参加ウィークの一部の状況については『幼児の教育 第

一〇〇巻第一〇号』及び『第一〇一卷第四号』に詳しい）。保育参加後は必ず園長・副園長と一緒に懇談のときをもつというのがその条件である。このときには学年を越えて保護者が集まるので、普段はあまり聞くことのない違う年齢の子どもの保護者の話を聞くチャンスにもなる。年少の保護者は年長の保護者の話を聞いて、我が子の成長のプロセスに少しではあつても見通しをもてるようになったり、その反対のケースでは我が子が確実に大きく成長していることを実感できたりもする。

私たち保育者は、初めの頃は私たちの保育の質が未熟だったこともあり大いに批判された。しかし、保育者が保護者から批判を受けたり、違う視点からの指摘を受けることで、自分たちの保育を説明できるように努力し始めた。また、保護者にも保育参加のときに楽しめるような工夫をすることなどが見られるようになってきた。園長・副園長との懇談会ではないが、批

判を浴びることが若い保育者を伸ばすきっかけになることを再確認できるようになってきた。

### 保護者会と保護者会活動の立ち上げ

保護者と園との恒常的な出合いの場が少なかった幼稚園部であったが、副園長がリーダーシップを執って、保護者会を立ち上げることにした。もちろんこれにもブリーングはあった。そのような活動がないからこの園を選んだのに、それらの活動が入ることは約束違反であるというものである。しかしそれにはめげずに、しばらくは交通整理として園側が主導を取るという条件で保護者会を立ち上げた。役員も選び、月一度役員会を開くこととした。役員会での決定事項は必ず園長・副園長との学年別懇談会でも流した。

保護者会の活動といっても、すべてボランティアベースである。絵本クラブ、おもちゃ工房「ピノキオ」を立ち上げ、六年目に入ってからには園芸クラブも

立ち上がっている。このボランティアベースの活動は、子どもの園生活を豊かで楽しいものにするために一役買ってくれている。また保護者のもつ力はすばらしく、時間がある分、準備もできるので、絵本クラブではかなり高度な芸術性の高い絵本の読み聞かせや、絵本に題材をとったブラックライトシアターでの公演など子どもたちに還元する活動が活発化している。また子どもたちの遊びに必要な遊具を制作するなど、おもちゃ工房ピノキオの活動も同じく活発化してきている。保護者のこれらの活躍は若い保育者には自分の保育技術を見直すよいチャンスとなっており、園全体の保育内容の質を高める上で大きな刺激となっている。

### 「あゆみ」の見直し

「あゆみ」とは、学期ごとに出している写真と成長の記録である。これも以前は小学校の通知表状のものであった。幼児期に一方的な通知表はいらないと考え、

その代わりに学期ごとの育ちがわかるような形式のものに変えたいと考え、実行に移した。

「あゆみ」を書き、子どもたちの写真を撮ることは担任の負担

を増やすことではある。しかし、保護者に子どもの様子を伝えるためには日々の保育にしっかりと取り組みなくてはならない。この五年間で、何回か形式や内容について改良を図ってきたが、最近ではこの「あゆみ」に保護者欄を設け、保護者からのコメントも入れている。子どもたちが大きくなって、社会の荒波にもまれるようになったとき、幼い日々親と共に当時の担任が自分のことをしっかりと見守り、支えてくれていたことを感じて心が温まるようなものにと願って継続している。



### 学年ごとのオープンクラス

幼稚部に赴任して二年半が経ったとき、元の大学の

建物の内装を幼稚園仕様にした新園舎への引越しがあった。このとき学年ごとにクラスの壁を取り払い、オープンクラスにした。学年ごとに担任が二人ずつ組むという形式である。クラスはオープンになっているので学年の保育は協力して進めていかななくてはならない。多少乱暴であったかもしれないが、相談して保育をつくっていく道を選ぶことになった。しかし、やってみて気づいたことは二人がしっかりと地に足をつけて、自立していなければ、本当の意味のチームティーチングはできないということである。そしてよく話すことがなされなければ、これまた成り立たない形態である。

### 未就園児クラスの充実

幼稚部には以前から未就園児クラスがおかれていた。三年保育を採用する以前に週一回のクラスとして三歳児クラスをもっていたのである。三年保育を始め

た後も、主任ともう一人の保育者が組んで、幼稚園の内容をもう少し単純化し、やさしくしたものを行っていた。多くの場合二時間に満たない活動時間であるが、きちっとしたカリキュラムがあるわけではなかった。

五年前から少しずつ拡大の方針で動き始めた。未就園児担当の教員も配し、募集活動もしっかり行った結果、年毎にクラス希望者が増えていった。週一回クラスが三クラス分、約五十組の親子が通ってきている（ウェイテリングリストもある）。ここは親が子どもをただ預けるのではなく、一緒に過ごす中でお互いに学んでいくというスタンスである。

併設大学学生の希望者には実習生として一緒に活動を担ってもらうようになった。保育前の準備、保育、そして保育後のミーティングまでを一続きと考え、なるべくそのすべてに参加し、できれば一年間、継続的に参加するように伝えている。通ってくる子どもたち

にとってお姉さんの存在は大きいし、学生も子どもと親の両方に触れるという貴重な体験をしていることになる。三年目からは未就園児クラスの教員は週二日ないし一日は幼稚園の保育に入っている。特に三歳児クラスに入ったことで、三歳時クラスの担任も二歳児に興味をもつようになり、共同作業で保育に関することを取り組み始めている。

### おわりに

先に掲げた八つの事柄は、どれも園を「開き」そこに集う「子ども」「保護者」「保育者」「実習生」が「共に支え、つながり、育ちあう」ための方策にほかならない。一つずつ見直しながら考えてきたことではあるが、いつの間にか方策という源流があるところでは合流しながら幼稚園という大地に大きな潤いをもたらすようになってきている。

(共立女子大学)